

# 「美人王国」とカメラ彼氏

青木まき

バンコクの公園にいと、デート中のカップルをよく見かける。座ってお話したり、ボートに乗ったりしているのは日本と同じだが、写真撮影をしているところにも

良く出会う。不思議なことに、二人仲良くチーズ！ではなく、ピンで撮っていることが多い。彼氏が大きなデジタル一眼レフを構えて彼女を撮る。彼女は池やブーゲンビリアの植え込みをバックにモデル立ち。胸の前で花を持ってみたり、池を背景にちよつと俯いて愁い気な横顔を見せて、プロ顔負けのポーズングである。彼氏はそれを何枚も撮る。撮り終わるたび、写真の出来をチェックしている。二人で顔を寄せ合ってモニターを覗き込む姿は微笑ましいが、よく見ていると彼女がダメ出しをして、気にいらぬ写真を消去させている。なかなかシビアだ。終わったな、と思ってみると、今度はロケーションを変えて撮影再開。それが何組もある。いつもいる。見ていてすごく気になるのである。

様子を見る限り、別にカメラ小僧とコスプレヤーのカップルというわけでもなさそう。あれはいったい何なのかと思つていたところ、ある日、タイ人の友人が笑いながら説明してくれた。それによると、彼らはああして撮った写真をPCで加工し、

携帯の待受やパソコンの背景にしたりするのだそうである。

「そんなに彼女の写真を持つてることが大事なんだ」と尋ねたところ、「それもそうだけど、彼が彼女の写真を彼女に送るのよ。それを彼女が自分の携帯の待受画面にするの」と言うのでびっくりした。

そういえば、以前あるタイ人の女子学生と仲良くなったとき「こんなに優秀でかわいい私と仲良くなつて、あなたは運がいいわ!」と清らかな笑顔で言われたことがある。あまりにも潔い自己礼賛に軽いカルチャーショックを受けたものだった。

これは極端な例だろうけれど、どうもタイの人々の間には、己の容貌に絶大な信頼を寄せる人が多いように思う。少なくとも日本よりは多い気がする。それは学校でも地域でもミスコン、ミスター・コン、ジュニア・ミスコン、さらにはミスター・レディ・コンテストがことあるごとに開かれ、彼我の美醜を大つばらに比較し意識する機会が日本より多そうだという環境によるのかも。しれない。そうした環境で幼少時から切磋琢磨を繰り返すせいかどうか、美しいという自覚のある人はそのことを隠そうとしない。美しいことは名誉であり、自分が美しいのであればそれを誇るの当然でしょ?

(それが何か?)という考え方はわかりやすい。少なくとも、自意識が屈折しないのでストレスは溜まりにくいだろう。

確かに彼氏にカメラをむけられているときの女の子たちは、本職のモデルさんのように自信に満ちており、ぺちゃくちゃお喋りしながらお菓子を食べているときは、別人のように綺麗に見えるから不思議だ。そこではもはや美貌が自信を生み出すのではなく、「美しい私」への厚い信頼が彼女を美しくしている。美しい私はさらなる自信に繋がりが、それが彼女を一層美しくする。いわばそれは美の永久製造機関。サスタナブル・ビューティ・システムなのである。

そんな「自分大好き」な女の子たちを支えるのが、彼女らを写真にとり、愛する人へ捧げるあの彼氏たちの存在なのだろうか。外国人の間では可愛らしい女性が多いと評されるタイランド。そんな「美人王国」の自意識は、あの「カメラ彼氏」たちの地味な努力と愛によって支えられているのかもしれない。

（あおき まき／在バンコク海外派遣員）